《研究ノート》

伊能忠敬測量隊第七次測量における安芸・備後北部の行程

西村直城

一　はじめに
二　第七次測量の概要
三　文化八年二月一七日～閏二月三日
四　文化八年閏二月五日～
五　おわりに

【要約】

伊能忠敬による第七次測量復路における文化八年（一八一一）の安芸・備後北部測量の行程を、その地域に関する諸資料と照らし合わせることで、忠敬の側からは語られることのない測量に協力した村々の姿が見えてくる。

一　はじめに

伊能忠敬（一七四五～一八一八）が一七年間の年月をかけて実施し、その没後の文政四年（一八二一）に「大日本沿海輿地全図」として成果がまとめられた一〇次にわたる全国測量の中で、安芸・備後両国における測量は文化二年（一八〇五）の第五次測量、文化六～八（一八〇九～一一）の第七次測量、及び文化八～一一（一八一二）[一]～一四）第八次測量の際に行われている。

これらの測量については、第五次測量において絵画として描かれた安芸国沿岸部と島嶼部の測量の様子[二]や、第七次測量往路時の忠敬と備後国安那郡神辺宿（福山市神辺町）の漢詩人菅茶山との対面[三]など、個々の出来事がこれまで主に紹介されてきた。本稿では、芸備両国に関する諸資料[四]と照らし合わせながら、伊能忠敬の「測量日記」[五]（以下「日記」）に記された第七次測量復路での芸備北部における全行程を辿る。

なお、年月日は旧暦で表記し、西暦は（　）内に記した。地名は現代の表記に統一した。街道は『広島県史』[六]、山城跡は『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』[七]で表記された名称を使用した。その他「日記」に明らかな誤記がある場合は、正しい表記に修正している。

「日記」に記された測量隊の行程を地図上で確認するために、国土地理院ホームページ（https://kochizu.gsi.go.jp/inouzu）掲載の伊能図を参考にした。御参照いただきたい。

二　第七次測量の概要

第七次測量は九州の測量を主目的としたもので、測量隊は文化六年八月二七日（一八〇九年一〇月六日）に江戸を発ち、往路は中山道・西国街道（山陽道）を測量した後に九州に渡り、復路は中国地方及び名古屋から甲府を経て江戸に至る内陸部の街道を測量し、文化八年五月九日（一八一一年六月二九日）に江戸に帰着している。なお、九州測量は第八次測量でも引き続き行われている。

測量隊が出立した文化六年八月、測量予定の村々や宿駅に測量隊の支援を命ずる老中の廻状が出された（八）。同年一一月三日（一二月九日）には、広島藩領内安芸国山県郡の郡役所が郡内の割庄屋に対して、測量隊の江戸出立と来訪の予定を通達している（九）。

寛政一二年（一八〇〇）の第一次測量の際は、忠敬個人が幕府の許可を得て測量を行っており、幕府から多少の手当ては出たが経費のほとんどは忠敬が自費で負担した。勘定奉行配下の役人から宿駅に対して、宿泊と運搬用の人馬の便宜をはかるようにとの添触れが出されたが、その費用も忠敬の負担であった。

しかし、伊能忠敬が幕臣となり幕府直轄事業として行った第五次測量以降は、勘定所から諸藩江戸藩邸留守居役へ老中の書付が渡され、測量への支援が通達された。幕府の役人が公用で旅行する場合、道中の宿駅に対して人馬の用意や宿泊・休憩の予定が先触れされたが、測量隊も同様であった。忠敬の内弟子にも手当てが与えられるようになった。

「日記」によれば、伊能忠敬を除く第七次測量復路の参加者は次のとおりである。幕府天文方下役は坂部貞兵衛、下河辺政五郎、青木勝治郎、永井要助の四名で、それぞれに供侍や従者がいた。忠敬の供侍は成田豊作、従者は清七、内弟子は植田文助、箱田良助、梁田栄蔵、他に棹取りの長蔵、平助の総勢一七名である。第七次調査では、内陸部の複数の街道を同時に測量するため、坂部貞兵衛の隊（以下「坂部隊」）が忠敬率いる本隊から別れて、しばしば別行程で測量を行っている。

幕府直轄事業のため、測量隊の宿泊先は幕府の役人や参勤交代で諸大名が宿泊する本陣などの施設や庄屋などの有力者の邸宅が充てられた。忠敬は測量予定地の村役人と打ち合わせをする必要から、事前に宿所に来訪するように先触れを行った。さらに宿泊地の郡役人や村役人、宿駅ならば町役人なども来訪し、忠敬の宿所は毎晩来客が絶えなかった。

忠敬は宿所で緯度を算出するため、可能な限り天体観測を行っている。「日記」には来客や観測の実施・未実施が記載されているが、坂部隊については来客及び天体観測の記載はない。なお、本稿では各宿泊地での来客及び天体観測については特に触れない。

三　文化八年二月一七日～閏二月三日

文化八年二月一五日（一八一一年三月九日）、九州測量を終え下関に渡った測量隊は、浜田藩（松平氏）領石見国浜田城下（島根県浜田市）に宿泊した。一七日に本隊（忠敬、青木、永井、箱田、長蔵）と坂部隊（坂部、下河辺、梁田、植田、平助）に分かれて浜田を出立、忠敬の本隊は石見銀山を経て石見銀山道を南下し、二月二九日（三月二三日）に出雲

国飯名郡赤名宿（島根県飯石郡飯南町）に宿泊した。

閏二月一日（三月二四日）、本隊は赤名峠を越えて広島藩領の備後国三次郡横谷村（三次市布野町横谷）に入った。当時の備後国は北部が広島藩（浅野氏）領、南部が福山藩（阿部氏）領で、その間に幕府領と中津藩（奥平氏）の飛び地が散在していた。

横谷村での測量隊への対応については、一部欠損しているが記録が残されている（一〇）。あらかじめ国境から上布野村（三次市布野町上布野）との境までの街道一町一八丁三八間（約五．九km）に一〇間（一八m）ごとに杭が打たれ、二月二四日～二六日には郡内各村から人を動員して、街道や宿所周辺の除雪が行われた。国境では広島藩士、郡役人・村役人、人夫四二名が測量隊を出迎え、測量の手伝いを行った。この日測量隊は横谷村内の途中まで測量を行い、村内の室市に戻り宿泊した。

室市は赤名宿と布野宿の中間に位置し、両宿間が坂道で難所が多いため公用者が宿泊・休憩する御休所を設置する目的で、元禄元年（一六八八）に当時の三次藩（広島藩支藩）からの援助を受けて成立した小集落である。「日記」では忠敬の宿所は「本陣」、その他の者の宿所は「脇宿」・「別宿」などと記しており、この夜の本陣は升屋幸四郎方、脇宿は大工七九郎方で、「日記」には記載がないが浜田屋伴助方にも宿泊している。

閏二月二日（三月二五日）、前日の測量終点から開始し、上布野村に入り布野宿まで測量を行った。布野宿は広島藩最北端に位置する宿駅で、広島藩は西国街道の宿駅に本陣、脇街道の宿駅に御客所・御茶屋を設けていたが、布野駅にも御客所が設けられていた（一一）。宿所は清兵衛方だが、同夜の来客に同町年寄長岡広蔵の名があり、長岡家が御客所を務めていたことから、この宿所は御客屋ではなかった可能性がある。

閏二月三日（三月二六日）に布野駅を出立し、下布野村（三次市布野町下布野）、戸河内村（同市戸河内）を経て、西河内村（同市西河内町）内を測量した。同村内で坂部隊と合流、三次町五日市町（同市三次町）に戻り宿泊した。

三次町は江の川・馬洗川・西城川の三河川が合流し、日本海側と瀬戸内海側を結ぶ諸街道が交わる交通の要地である。五日市町・内町（同町）及び十日市町（同市十日市町）を総称して近世には三次町・三次三ケ町と呼ばれていた。寛永九年（一六三二）～享保五年（一七二〇）には広島藩の支藩である三次藩の藩庁が置かれていたが、この当時は三次郡代官の管轄であった。二年後には三次町に奉行が置かれ、郡と町が別支配になった。忠敬の宿所は「日記」に明記されていないが、後述するとおり前日の坂部隊の宿所が「本陣吉舎屋作右衛門、脇宿堺屋三兵衛」と記されていることから、忠敬は吉舎屋に宿泊したと思われる。吉舎屋・堺屋は宿駅である三次町に置かれた御茶屋を務めていた（一二）。

一行が宿所に向かう途中、安那郡箱田村（福山市神辺町箱田）の庄屋で忠敬の内弟子・箱田良助の父親である細川園右衛門、坂部の供侍である松井沢次の父親である同郡中条村（同町中条）の松井弥治郎、及び備中国小田郡大江村（岡山県井原市大江）の算術家・測量家である谷東平が出迎えた。谷東平は大坂で麻田剛立、江戸で忠敬から天文学を学び、第七次測量往路で備中・備後の西国街道測量の際に同行を許されていた。園右衛門と東平は、箱田良助が今回の測量に際して忠敬宛に提出した誓約書に保証人として署名している（一三）。測量隊は翌日も三次町に留まっ

た。

坂部隊は本隊と別れて浜田城下と広島城下を結ぶ石見街道を南下し、二月二一日（三月一五日）に広島藩領安芸国山県郡大塚村（山県郡北広島町大塚）に入った。この日は大朝村（同町大朝）まで測量を行い、同村浄土真宗円立寺に宿泊した。

二月二二日（三月一六日）、新庄村（山県郡北広島町新庄）、中山村（同中山）を経て蔵迫村（同蔵迫）庄屋清兵衛方を宿所とした。行程を優先したためか、宿駅がある中山村は通過し隣村の蔵迫村に宿泊している。

二月二三日（三月一七日）、寺原村（山県郡北広島町寺原）、春木村（同春木）、有間村（同有間）、今田村（同今田）、後有田村（同後有田）、石井谷村（同石井谷）を経て本地村（同本地）に入り、本地宿高札場まで測量を行った。高札場は法令・禁令などを掲示するため人目につきやすい場所に設置されていたためか、測量隊は宿泊地に高札場がある場合にはそこを一日の測量の終点とすることが多い。

宿所は「日記」に「浜田藩侯本陣」と記された庄屋三戸官右衛門方である。本地宿には本陣が置かれ、浜田藩主が参勤交代で草津（広島市西区草津）から船に乗るために石見街道を下る際の宿所としていた（一四）。

二月二四日（三月一八日）、山県郡と高宮郡の郡境である本地村の可部峠まで午前中に測量を終え、峠の「一軒家」百姓長助方で昼食をとり、そこを宿所とした。可部峠は難所であり、翌日の行程も考慮してこの日は測量を早く終えたのであろう。

二月二五日（三月一九日）、高宮郡南原村（広島市安佐北区可部町南原）に入り、往路測量中の文化六年一二月七日（一八一〇年一月一一日）に印を残した下町屋村（同町下町屋）の出雲街道との分岐点まで測量を行った。高札場などの目印になるものがない場合、測量隊は杭を打って印として残していた。同村の浄土真宗西光寺と庄屋田中助五郎方を宿所とした。

二月二六日（三月二〇日）、下町屋村の印から出雲街道に入り北上しながら測量を行い、上町屋村（広島市安佐北区可部町上町屋）、大林村（同大林）、高田郡向山村（安芸高田市八千代町向山）を経て、上根村（同町上根）百姓利左衛門方を宿所とした。「日記」には「酒造家にて家作能し」と記されている。

二月二七日（三月二一日）、下根村（安芸高田市八千代町下根）、佐々井村（同町佐々井）、勝田村（同町勝田）を経て江の川沿いに北上し、上入江村（同市吉田町上入江）の「入江市渡場橋詰」まで測量を行った。この渡し場には将軍の代替わりに際して全国を査察する幕府巡見使や藩主が視察で通行する際に舟橋が架けられたが（一五）、測量隊にも同様の対応が行われたことがわかる。「日記」によれば、三〇間（約五四ｍ）の「板橋」が架けられていた。宿所は「酒造家」の百姓次郎右衛門方であった。

二月二八日（三月二二日）、上入江村から橋を渡り、長屋村（安芸高田市吉田町長屋）、桂村（同町桂ほか）、高野村（同町上高野）、川本村（同町川本）、山手村（同町山手）、常友村（同町常友）を経て吉田村（同町吉田）に入った。「日記」及び伊能図には、吉田村に十日市村が併記されているが、十日市村は戦国時代の毛利氏郡山城下町方の村名であり、当時は実在しない。幕府巡見使通行の際には十日市村の名が記録されて

いることから、測量隊にも同様の説明がなされたのであろう。吉田村内の宿駅吉田宿は、毛利時代以来の町場で、十日市町には御茶屋が置かれていた。測量隊は吉田宿内を鯨田町、胡町、左新町、十日市町、川手町、橋本町と測量した後、十日市町丸屋又兵衛を宿所とした。

二月二九日(三月二三日)、下小原村(安芸高田市甲田町下小原)を経て、上甲立村(同町上甲立)まで測量を行った。同村は吉田と三次の間宿でかつては御茶屋も置かれていたが、当時は三国屋助右衛門宅が藩主視察時の本陣とされていた(一五)。宿所は「酒造家」安国屋方であった。

閏二月一日(三月二四日)、下甲立村(安芸高田市甲田町下甲立)、深瀬村(同町深瀬)を経て秋町村(三次市秋町)の安芸国と備後国の境界に達した。江の川を渡り、対岸の備後国三次郡上志和地村(同市上志和地町)川端まで測量を行い、深瀬村の山形屋庄兵衛方を宿所とした。「日記」には「芸州領二三の豪家なり」と記されている。

閏二月二日(三月二五日)、備後国に入り志和地村の川端から測量を開始、青河村(三次市青河町)、西酒屋村(同市西酒屋町)を経て原村(同市十日市町)に入った。同村内の十日市町から「仮土橋」を渡り五日市町(同市三次町)に入り、同町本町の吉舎屋前まで測量した。先述のとおり、宿所は本陣吉舎屋作右衛門方、脇宿堺屋三兵衛方とした。

閏二月三日(三月二六日)、本陣から測量を開始した坂部隊は五日市町内を測量しながら北上、原村字宮の峡を経て西河内村に入り先述の通り本隊と合流した。宮の峡は西城川に沿った山の中腹を削って道を作った難所であった(一二)。

四　文化八年閏二月五日〜

閏二月五日(三月二八日)、先に忠敬・下河辺・植田・箱田・平助の本隊が出立、遅れて坂部、青木、永井、梁田、長蔵が備中街道を東に向かって出立した。本隊は馬洗川沿いに石州銀山道を南下、南畑敷村(三次市南畑敷町)を経て三谿郡に入った。江田川内村(同市江田川内町)、大田幸村(同市大田幸町)塩町、木乗村(同市木乗町)、志幸村(同市志幸町)、新宮山城跡、岡田村(同市三良坂町岡田)、大田幸村字小川を経て三良坂村(同町三良坂)に入り、三良坂町まで測量を行った。三良坂町は正規の宿駅ではないが、三次・吉舎の間駅の役割を持ち、町役人も置かれていた。吉舎屋幾左衛門方、金屋政右衛門方に宿泊した。

閏二月六日(三月二九日)、敷地村(三次市吉舎町敷地)、矢野地村(同町矢野地)、海田原村(同町海田原)、三玉村(同町三玉)を経て吉舎村(同町吉舎)に入り、宿駅である吉舎宿七日市の高札場まで測量した。この区間は街道と馬洗川が何度も交差するため、度々渡河しなければならなかった。宿所は庄屋清十郎方。吉舎宿では、吉舎村の庄屋泉屋が御茶屋の役割を果たしていた(一六)。

閏二月七日(三月三〇日)、高札場より測量を始め同宿四日市を経て、世羅郡宇賀村(三次市甲奴町宇賀ほか)から石州銀山道を離れ東に向かい、甲奴郡梶田村(同町梶田)の境まで測量を行った。その後宇賀村に戻り、「小酒造家」の庄屋要右衛門方を宿所とした。

閏二月八日(三月三一日)、梶田村から本郷村(三次市甲奴郡本郷)を経て、石見街道に入り南下、幕府領上下村(府中市上下町上下)に入

り上下宿で測量後、中津藩領井永村（同町井永）まで測量を行い上下宿に戻り、本陣は家光屋吉右衛門方、脇宿は阿字屋秀平方を宿所とした。

上下村には石見銀山を支配する大森代官所の出張陣屋として、この周辺の幕府領神石郡一〇か村、甲奴郡一二か村を管轄する代官所が置かれていた。また、上下宿は石州銀山道とともに石見銀山で産出された銀を運ぶ石見街道の中継地点の役割を果たしていた（一七）。

閏二月九日（四月一日）、井永村より測量を開始し、水永村（府中市上下町水永）、斗升村（同市斗升町）を経て福山藩領に入り、芦田郡行縢村（同市行縢町）内まで測量を行い、本陣は同村庄屋喜一郎方、脇宿は百姓長右衛門方を宿所とした。

閏二月一〇日（四月二日）、木野山村（府中市木野山町）、荒谷村（同市荒谷町）、芦田川の分地橋を渡り出口村（同市出口町）、甘南備神社を経て府中市村上町（同市府中町）まで測量を行った。府中市村内には当時町場が九町あり、石見街道の宿場町である。本陣は浦上甚兵衛方、脇宿は阿賀屋源右衛門方であった。

閏二月一一日（四月三日）、府中市村から町村（府中市元町）、広谷村（同市広谷町ほか）、中須村（同市中須町）を経て、品治郡新市村（福山市新市町新市）から西城路に入り北上、宮内村（同町宮内）の吉備津神社まで測量を行い、新市村に戻り再び石見街道に入った。戸手村（同町戸手）から脇道に入り、中島村（同市駅家町中島ほか）を経て万能倉村（同町万能倉）まで測量した後、同村の庄屋伊右衛門方に宿泊した。

戸手村の信岡家文書には、測量隊通行時の一件が残されている（一八）。先述の文化六年八月付老中廻状の写し、測量隊の宿泊予定の先触れ、測量隊が戸手村でとった昼食の献立や諸費用に関する記録などである。

その内容から測量隊が三次を出立する閏二月五日から二三日までの予定の先触れが閏二月三日に作成され、沿道の村々に伝えられたことがわかる。九日には福山藩の役人から飛脚で戸手村での昼食が庄屋に通達されたが、昼食についてそれ以前にも通達があったと思われる。戸手村庄屋は一〇日夜に府中市村へ行き忠敬を訪問しているが、その際に九日に宿泊した行縢村にも出向いている。他村の対応を確認したのであろう。

昼食については、当初予定された献立より立派な食事が供せられている。忠敬は食事について一汁一菜以外は無用と常に先触れをしていたが、幕府役人であることを配慮してか、献立が過剰になってしまったようだ。結果として出費は福山藩から支給された金額を大きく上回り、超過分は戸手村の庄屋ほかが負担することになった。

閏二月一二日（四月四日）、万能倉村から深津郡上岩成村（福山市御幸町上岩成）に入り、石見街道から東城路に入り北上、安那郡下加茂村（同市加茂町下加茂）まで測量して印を残した。東城路は、福山城下と奴可郡東城宿を結び、更に北へ伯耆国（鳥取県）まで続く街道である。

下加茂村から一旦上岩成村に戻り、西国街道へと向かう脇道に入る。道上村（福山市神辺町道上）を過ぎると道の北は幕府領西中条村（同町西中条）、南は福山藩領徳田村（同町徳田ほか）、幕府領箱田村（同町箱田）の村境に沿って測量し、福山藩領湯野村（同町湯野）を経て下御領村（同町下御領）に入った。同村内の国分寺で文化六年一一月二七日（一八一〇年一月二日）に測量した西国街道の道碑に到着し、この日の測量を終えた。この夜は、箱田村庄屋細川園右衛門方に宿泊した。前述のとおり、

箱田良助の実家である。

閏二月一三日（四月五日）、下加茂村まで戻り前日に残した印から始め東城路を北上、上加茂村（福山市加茂町上加茂）、下加茂村、中野村（同町中野）、中津藩領百谷村（同町百谷）を経て、福山藩領永谷村（福山市駅家町服部永谷）内まで測量し、百谷村に戻った。宿所は大庄屋山手十郎平方で、谷東平が再び訪問している。

閏二月一四日（四月六日）、左に永谷村、右に百谷村の位置から測量を再開し、西に福山藩領本郷村（福山市駅家町服部本郷）・芦田郡藤尾村（同市新市町藤尾・神石郡神石高原町藤尾）、東に中津藩領百谷村・幕府領神石郡坂瀬川村（神石郡神石高原町坂瀬川）の村境を測量しながら進み、坂瀬川村に入り、幕府領神石郡井関村（同町井関）で測量を終えた。同村年寄久治郎方に宿泊した。「日記」には「此日山道人家なし」とある。伊能図では、百谷村以北で人家が全く描かれていない区間が確認できる。

閏二月一五日（四月七日）、井関村より測量を開始、西に幕府領大矢村（神石郡神石高原町大矢）、東に井関村・幕府領近田村（同町近田）、中津藩領安田村（同町安田）の村境を測量しながら北上し、東油木村（同町油木）に入った。坂部隊が閏二月一一日に残した印まで測量を行い、同村油木宿の庄屋七郎左衛門方に宿泊した。七郎左衛門は屋号が胡屋で、一度庄屋を辞したが文化元年（一八〇四）頃に再任されている（一九）。中津藩領では庄屋宅が幕府巡見使の本陣として使われていた（二〇）。

油木宿で忠敬は、幕府天文方からの御用状を受け取っている。この御用状は二月上旬に天文方から備中松山藩へ届けられ、一〇日に同宿に泊まった坂部が受け取っていた。諸藩や幕府領には、天文方と測量隊が交わす御用状の回送が命じられていた。

閏二月一六日（四月八日）、東油木村を出立して東城へ向かったが、この区間は坂部隊が測量済みのため歩くだけである。中津藩領神石郡西油木村（神石郡神石高原町油木）、新免村（同町新免、庄原市東城町新免）を経て、三坂村（庄原市東城町三坂）から東城路を離れ広島藩領奴可郡宇山村（同町帝釈宇山）、未渡村（同町未渡）に入る。この辺りは現在国の名勝に指定されている帝釈峡で、忠敬一行は寄り道をして「唐門、業ノ橋」、そして「帝釈天岩窟」を見学し、川西村（同町川西）を経て東城町（同町東城）に着き、本陣上梶屋重三郎、脇宿梶屋庄七郎方に宿泊した。東城町は広島藩家老の堀田浅野家の給地で、同家は五品嶽城跡山麓に屋敷を構えていた。上梶屋は文化二年（一八〇五）に広島藩主浅野斉賢が鷹狩を兼ねた国内巡検を行った際の本陣であった（二一）。

閏二月一七日（四月九日）、東城町本町高札場に坂部隊が残した印から備中街道を東へ測量を開始し、川東村（庄原市東城町川東）、福代村（同町福代）を経て、備中国哲多郡の幕府領に入った。

坂部隊（坂部、青木、永井、箱田、長蔵）は**閏二月五日（三月二八日）**に本隊と別れ三次十日市本町高札場から測量を開始し、備中街道を東へ向かった。横町、上新町から原村、南畠敷村、比叡尾山城跡を経て、本隊がこの日に同村内に残した印まで測量した。その後馬洗川の渡し場を渡り、畠敷村、三谿郡和知村を経て恵蘇郡下村（庄原市平和町）まで測量を終えた。宿所は百姓六蔵方及び惣兵衛方である。

閏二月六日（三月二九日）、木戸村（庄原市木戸町）、上村（同市山内町）、

下原村（同市七塚町）を経て三上郡庄原村（同市本町）に入り、三上郡唯一の宿駅である庄原町高札場まで測量した。宿所は滑屋三左衛門、桟敷屋広右衛門方。両家は同村の庄屋であり、「日記」に「酒造家」とあるとおり酒造業も営んでいた。

閏二月七日（三月三〇日）、庄原宿の高札場から東城町に向けて測量を開始し、永末村（同市永末町）、小用村（同市小用町）を経て本村（同市本村）まで測量した。宿所は大庄屋柚木源左衛門方。

閏二月八日（三月三一日）、始終村を経て未渡村まで測量し、同村庄屋道明多蔵方に宿泊した。

閏二月九日（四月一日）、帝釈天、宇山村、川西村、五品嶽城跡、途中に印を残し、東城町本町高札場まで測量、下梶屋庄七郎方に宿泊した。

閏二月一〇日（四月二日）、前日の印から測量を開始し、東城街道を南下、久代村（庄原市東城町久代）、中津藩領神石郡新免村を経て帝釈川を渡り、西油木村（神石郡神石高原町油木）古市、東油木村まで測量を行った。宿所は胡屋七郎左衛門方である。

閏二月一一日（四月三日）、東油木村に先述の本隊に引き継ぐ印を残し、東城街道を離れ東に向かい幕府領笹尾村（神石高原町笹尾）、中津領下豊松村（同町中平）、幕府領中平村（同町下豊松）まで測る。宿所は庄屋孫兵衛方。

閏二月一二日（四月四日）、中平村内の下豊松村への分かれ道から測量を開始し、備中川上郡の幕府領平川村（岡山県高梁市）に入った。坂部隊はその後、閏二月二一日（四月一三日）に新見（岡山県新見市）で本隊と合流した。

五　おわりに

測量隊の行程を辿ってみると、必ずしも主要な街道のみを測量したのではないことがわかる。例えば、赤名峠から石見銀山道を経て石見街道に入った本隊が、そのまま南下して西国街道に至るのではなく、脇道に入り東城路へ北上する分岐点に印を残した後、以前測量した西国街道の道標に到達している。効率的な測量を行うために、入念に行程を検討した結果であろう。そのため、宿所も施設の充実した最寄りの宿駅に拘らず、測量の効率を優先して選んでいる。

また、県内の諸資料と突き合わせることで、幕府の直轄事業である測量隊が、巡見使を先例としてそれに準ずる待遇を受けていたことがわかる。忠敬は測量にあたって村々からの支援を求めたが、過度な待遇を要求してはいなかった。しかし巡見使への接待と同様に、測量隊も村々に大きな負担を強いる結果となっていた。「日記」には記述されていないが、伊能忠敬の「偉業」は村々の測量に対する多大な労力や費用の負担によって支えられていた。本稿では基本的な県内資料を参考にしたが、今後新たな資料の掘り起こしによって、その実態をより明らかにしていくことが課題である。

なお、第八次測量時の芸備での足跡については別稿に譲りたい。

本稿の執筆にあたっては、伊能忠敬記念館紺野浩幸氏から御教示をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

（注）

一　文化八年一一月二五日（一八一二年一月九日）出立。

二　「浦島測量之図および御手洗測量之図の復刻と解説」（呉入船山記念館『館報入船山』第七号　二〇〇五年　所収）

三　富士川英郎『菅茶山』一九九〇年　福武書店

西村「菅茶山と箱田良助」（福山城博物館『伊能忠敬の内弟子筆頭箱田良助と榎本武揚』二〇〇九年　所収）

四　『日本歴史地名大系３５　広島県の地名』一九八二年　平凡社

『角川日本地名大辞典３４　広島県』昭和六二年　角川書店

頼杏坪他編『芸藩通志』（復刻）昭和五六年　国書刊行会

その他、後掲書を参考文献とした。

五　佐久間達夫校訂『伊能忠敬　測量日記』第三巻九州一次　一九九八年

六　広島県『広島県史』近世２　昭和五九年　図二一二「近世後期における芸備地域の主要道路網」

七　広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第４集　一九九六年

八　以下、伊能忠敬の測量全般については次の文献を参考にした。

渡辺修一郎『伊能忠敬の歩いた日本』一九九九年　ちくま新書

伊能忠敬研究会『伊能忠敬日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年―』前編二〇一八（平成三〇）年

九　「幕府天文方伊能忠敬等通行につき達」（広島県『広島県史』近世資料編Ⅳ　昭和五〇年　所収）

一〇　「文化八年測量方御通行之節御泊所万書（以下欠字）」

※原資料未見のため、布野村『布野村誌』通史編　平成一四年　を参考にした。

一一　『広島県史』近世１では、藩の賓客を接待するのが御客屋、藩主の別荘というべきものが御茶屋としている。

一二　三次市『三次市史１』平成一六年

一三　園尾裕「三人の和算・暦学・天文学者たち　谷東平・小野光右衛門・箱田良助」（福山城博物館『伊能忠敬の内弟子筆頭箱田良助と榎本武揚』二〇〇九年所収）

一四　千代田町町役場『千代田町史』通史編（上）平成一四年

一五　高田郡町村会『高田郡史』民俗編　昭和五〇年

一六　吉舎町教育委員会『吉舎町史』下巻　平成三年

一七　上下町教育委員会『上下町史』通史編　平成一五年

一八　山名洋通「公儀測量方通行一件文書」（『福山城博物館友の会だより№三〇』二〇〇〇年所収）

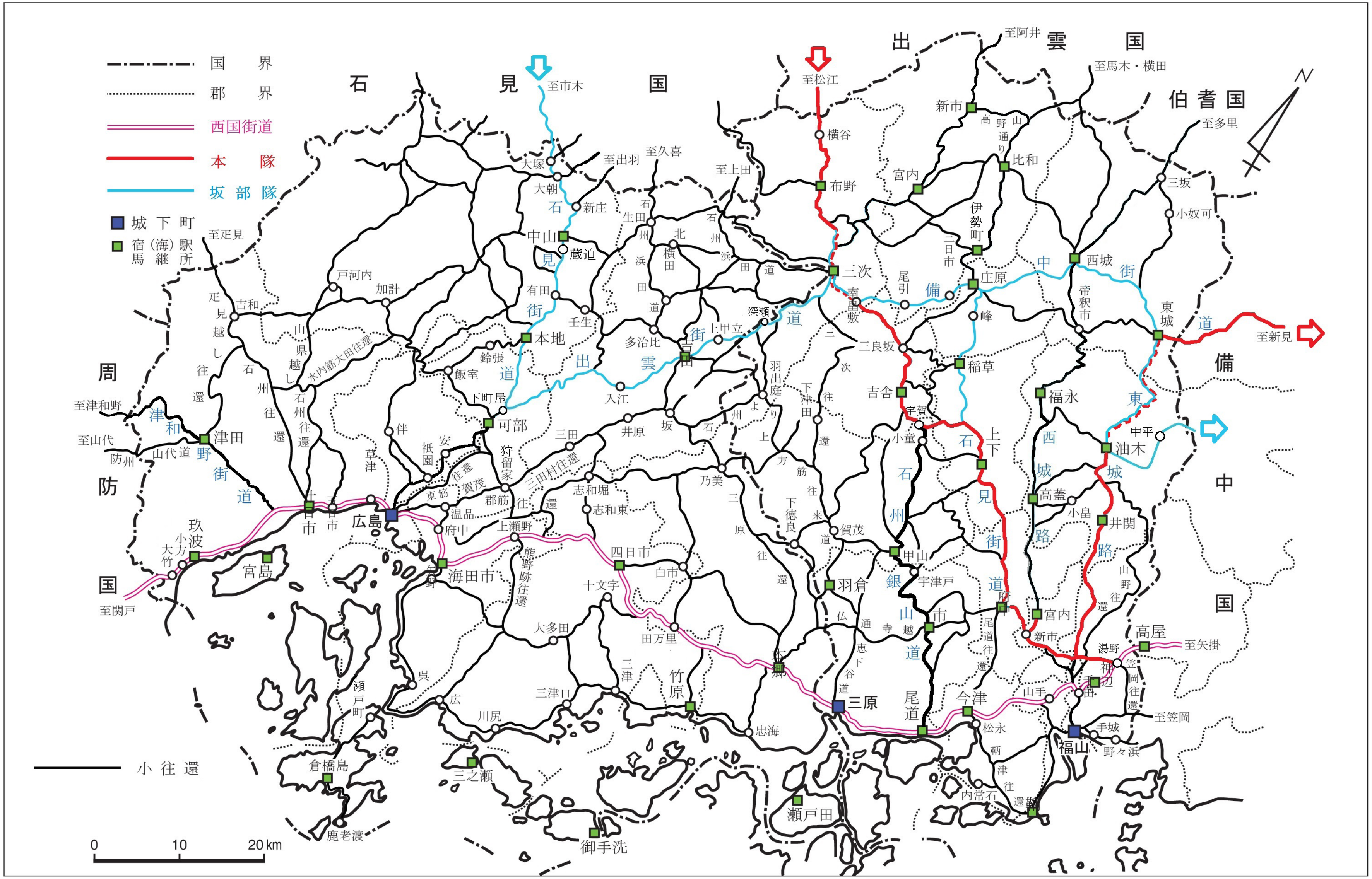
なお当該資料の一部は、新市町『新市町史資料編Ⅱ』二〇〇二年に収録されている。

一九　神石郡教育会編『神石郡誌』昭和四七年　名著出版

二〇　油木町『油木町史』通史編上巻　平成一六年

二一　「郡務拾聚録」天巻（東城町教育委員会『東城町史』古代中世近世資料編近世編　平成六年　所収）

（にしむら　なおき　当館学芸課長）



伊能忠敬第7次測量（復路）行程地図

『広島県史』近世２　図212「近世後期における芸備地域の主要道路網」をもとに作成した